

## 在宅医療～多職種による地域連携へのあゆみ～

板橋区医師会 会長 水野 重樹  
板橋区医師会在宅医会 会長 佐藤 恵

我が国は、世界のどの国も経験したことのない超高齢社会に向かっています。2030年までは後期高齢者人口が倍増することにより、認知症高齢者や独居高齢者の激増する多死社会が予想されています。さらに医学の発達により、国民の疾病構造が変化したことによる医療提供体制の見直しが必要とされました。医療依存度の高い小児から高齢者までたくさんの患者さんが療養され、地域ではその生き方を支援していくことが求められています。かかりつけ医に望まれる医療は、延命や救命を迫及する医療からその人らしさを保ちながら地域で生きていくことを支援する医療にその主体を移していきました。一方で、国は地域包括ケアシステムを掲げ、多職種や地域住民が支える地域を市区町村行政指導で構築する方針です。板橋区医師会はいち早く、この時代に要請されたかかりつけ医医療と地域連携に着手しました。板橋区は人口約56万人、高齢者比は22.9%です(平成28年5月)。都内の他区と同様に高齢者世帯割合が今後ピークを迎えることが予想されています。板橋区は40以上の病院があり医療資源の潤沢な地域です。診療所を開設している医

師も多く、これらの医療機関をまとめる板橋区医師会は23区内で唯一、医師会病院を有し、在宅部門を集約する板橋区医師会在宅医療センター(地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション、療養相談室)も開設しています。そして、これら社会資源を総動員して早期より「療養」を掲げ医療と介護両面での支援事業を行ってきました。また、医師会には共助の枠を超え自助や互助への協力も求められています。以下に在宅医療に関連する板橋区医師会の取り組みを紹介します。

### ■在宅療養基盤整備

#### 1. 病診連携構築

##### (1)がん連携から非がん疾患も含めたサバイバーシップへ

平成24年よりがん疾患療養研修会が開始されました。がん療養患者支援(抗がん治療、支持療法、緩和ケアなど)を目的として区内がん拠点病院専門医、かかりつけ医、訪問看護師による症例検討を継続し、在宅療養支援チームと専門医の顔の見える連携の場となりました。その後、この会はサバイバーシップ研究会と名前を変え、帝京大学医学部附属病院、日本大学医学部附

## がん学術講演会

日 時	テーマ	コメンテーター	参加者
H24. 7	在宅連携	帝京大学	医師・看護師
H24.11	がん症例検討	医師会	医師・看護師・薬剤師
H25. 3	在宅がん症例	医師会	医師・看護師・薬剤師
H25.11	がん骨転移症例	帝京大学	医師・看護師・薬剤師・理学療法士
H26. 5	PICC カテ	豊島病院	医師・看護師・薬剤師
H26.12	腫瘍内科	帝京大学 医師会	医師・看護師・薬剤師
H27.10	緩和ケア	豊島病院 医師会	医師・看護師・薬剤師

## サバイバーシップ研究会

日 時	テーマ	コメンテーター	参加者
H28. 3	在宅医療	医師会	医師・看護師・薬剤師
H28. 6	パーキンソン病・臨床倫理	医師会	医師・看護師・薬剤師
H28.11	緩和ケア・意思決定支援	豊島病院	医師・看護師・薬剤師
H29. 4	認知症・意思決定支援	健康長寿医療センター	医師・看護師・薬剤師

属板橋病院、東京都健康長寿医療センター、東京都保健医療公社豊島病院からの世話人の先生方とともに継続されています。このサバイバーシップ研究会は対象疾患をがんに限定せず、生活に支障をきたす疾患の療養支援を目的としています。病院や診療所スタッフのみならず、多職種によるグループワークが毎回行われています。

### (2)退院前カンファレンス推進活動

平成 24 年度に退院支援スクリーニングシートを作成し、療養相談室と医師会病院で連携しました。その後、病院部を通じて退院前の調整をするために本シートの有用性を区内中小病院にも周知し、退院支援の重要性を広めていきました。現在は、ほとんどの病院に退院支援担当部門があり、各施設が独自のアセスメントシートを使用しています。平成 25 年には患者が安心して退院できる退院支援が行われていることを周知するために、区民公開講座を開催しました。寸劇で行った「退院前カンファレン

ス」は好評で講演後のアンケートでは、地域療養情報の理解を深めることのみならず、あらためて生き方を考える良いきっかけになったなどの感想が寄せられました。

## 2. 多職種連携構築と地域コミュニティへの参加

### (1)地域医療研修会

平成 19 年からテーマを見直し、多職種に向けた研修会となっていました。テーマは認知症、がん、リハビリテーション、薬剤情報、患者支援など多岐にわたり、開催頻度も年に 3～4 回と増えました。現在、多職種研修会は在宅療養ネットワーク懇話会などに引き継がれています。

### (2)板橋区医師会医学会

詳細は他稿に譲りますが、多職種参加型の医学会は板橋区の顔が見える多職種連携の重要な機会となっています。

### (3)在宅療養ネットワーク懇話会

かかりつけ医、病院医、歯科医師、薬剤師、看護師、柔道整復師、理学療法士、ソー

## 在宅療養ネットワーク懇話会

	日 時	幹事団体	テーマ	参加人数
第 1 回	H22. 3.29	医師会	ケアカンファレンス	106 人
第 2 回	H22. 7. 3	医師会	退院前カンファレンス	105
第 3 回	H22.11.13	歯科医師会	摂食嚥下評価	148
第 4 回	H23. 7. 2	区内看護師	病診・看看・医介連携	285
第 5 回	H23. 2.25	薬剤師会	薬剤師のチーム医療	90
第 6 回	H24. 2.25	施設・行政	介護保険事業計画	89
第 7 回	H24. 7.28	病院連携室	地域医療連携の課題	270
第 8 回	H24.12. 1	歯科医師会	訪問歯科診療	85
第 9 回	H25. 3.13	薬剤師会	地域防災計画	101
第 10 回	H25. 7.17	区内看護師	退院支援	129
第 11 回	H26. 3.12	歯科医師会	摂食嚥下評価とリハビリ	146
第 12 回	H26. 7.30	施設・包括・板橋区	地域包括ケアシステム	289
第 13 回	H26.12.13	医師会	多職種からの在宅療養	114
第 14 回	H27. 7.25	看護・病院連携室	救急医療の現場	111
第 15 回	H29. 2. 4	板橋区	板橋区版 AIP	116
第 16 回	H29. 6.24	柔道整復師会 ボランティア団体	ほねつぎが行う在宅療養村 芝居「支え合うまち」	88

シャルワーカー、介護施設スタッフ、介護支援専門員、地域包括支援センタースタッフ、ボランティア団体、行政など10職種以上からなる懇話会です。各職種がどんな役割を担っているかを知り、共に何ができるかを話し合う会です。各職種が輪番制で独自のテーマを企画し開催していきました。平成27年より板橋区が代表世話人となり、医師会も協力して定期開催を支援しています。また、生活支援の要であるボランティア団体にも参加していただき、行政参加と多職種連携のもとに地域包括ケアの基盤作りが進んでいます。

### (4)在宅医療機能リスト作成

平成24年度に在宅療養に係る社会資源リストを作成しました。板橋区内の在宅医、訪問歯科医、訪問薬剤師、訪問看護師、療養支援が可能な病院、医療依存度の高い利用者受け入れ可能施設等の

機能リストです。本リストは医師会ホームページ上でも公開しており、定期的に更新しています。都内病院の退院支援室にも周知し、退院支援時に有用なリストになっています。

### (5)区民による地域づくり活動への協力

かかりつけ医が地域に出て、熱意ある地域コミュニティメンバーと協働することが地域包括ケアには重要です。いたばし総合ボランティアセンターが地域づくりを目標に、地域包括支援センターの18圏域で「いたばしまちの学校」を開催しています。医師会は平成25年より、この「いたばしまちの学校」に協力を開始しました。各圏域で医師会員の定期的な講演活動などは、地域づくり継続の一助を担っています。地域により温度差はありますが、医師会は地域と協力して均てん化された地域づくりを目指す必要があるでしょう。紙面の関係で

## いたばしまちの学校開催記録

平成25年度

(敬称略)

	地域	講師
1	清水地域	國光登志子
2	常盤台地域	堀井 有尚
3	高島平地域	佐藤 恵
4	徳丸地域	佐藤 恵
5	仲宿地域	島田 潔

平成26年度

	地域	講師
6	富士見地域	島田 潔
7	前野地域	佐藤 恵
8	桜川地域	齋藤 英治
9	下赤塚地域	水野 重樹
10	板橋地域	鈴木 陽一
11	蓮根地域	佐藤 恵
12	熊野地域	鈺 裕和
13	仲町地域	鈺 裕和
14	大谷口地域	依藤 壽
15	中台地域	依藤 壽
16	志村坂上地域	石川 徹
17	舟渡地域	房野 隆文
18	成増地域	多比良 清

18圏域を初回に一巡した開催記録を掲載します。

その後もまちの学校への協力は継続しています。

### 3. 在宅療養連携拠点構築

#### (1)在宅医療センター

詳細は他稿を参照ください。

#### (2)在宅医療連携拠点事業（災害復興枠）

平成24年度に厚生労働省より在宅医療連携拠点事業の採択を受け、高島平地区を対象に医療と介護の連携拠点を展開しました。

この事業の主たる目的は次の5つです。

#### ①急性期医療、維持期療養、看取り療養

における連携システムの構築と教育

②介護支援専門員への医療支援に関するサポート

③自助、互助の限界地域における医療・介護情報の効率的提供

④災害時の効率的な救援に関する連携

⑤区民意識の啓発

本事業は1年間で終了しましたが、この連携拠点の必要性を鑑みて、医師会は区全体を対象とした連携拠点として療養相談室を在宅医療センターに新設しました。全国的にも注目され、多数の地域から視察依頼が舞い込んでいます。

### ■在宅医支援・診診連携・小児在宅

#### 1. 板橋区医師会在宅医会

区内在宅医の連携構築、在宅医療に参加しやすいシステムや情報提供を目的として平成23年に発足されました。研修会を開催するほかメーリングリストを活用した情報交換や在宅医依頼がなされています。詳細は他稿を参照ください。

#### 2. 副主治医調整会議

一人開業の多い地域性に対応した在宅医療支援を目的とする会議体です。平成22年度に板橋区医師会高島平訪問看護ステーションと連携する在宅医にアンケートを行い、要望にこたえる形で開始されました。在宅医が緊急対応できない期間をカバーできる副主治医を準備することが主な目的となっています。在宅医会として平成24年5月より毎月グループカンファレンスを開催していましたが、平成26年11月よりは医師会在宅部が担当し、「副主治医調整会議」となりました。

### 3. ICTによる情報共有

平成26年1月より、主治医副主治医連携における患者情報共有や多職種連携のツールとして活用しています。参加施設は年々増加し、現在25診療所・4病院・3訪問看護ステーション・2訪問薬局・1地域包括支援センター・4居宅介護支援事業所・1歯科診療所となっています。個人情報保護を遵守しながら、今後はさらなる参加職種や施設数の増加に加えて記載業務に負担の少ない情報共有ツールの工夫が望まれています。

### 4. 小児在宅

新生児の救命医療の進歩や高齢出産の増加などにより、高度の医療を必要としている患児に向けた地域療養支援が必要となりました。このような状況を鑑み、医師会は平成25年度に小児在宅医療連携拠点事業を板橋区と共に展開しました。小児科医会、在宅医会が連携し、小児在宅医機能リストがまとめられました。連携拠点は療養相談室が担当しています。小児在宅医療研修会も、心身障害児総合医療療育センターの協力を得て在宅医や訪問看護師を対象に6回開催されています。

### 5. 在宅患者緊急一時入院病床確保事業

板橋区の事業により医師会病院に後方病床を1床確保しています。後方病床の確保は在宅療養者の不安軽減にとっても重要であり、地域包括ケア推進につながっています。

#### ■ 区民への情報提供と意識啓発

#### 1. 区民公開講座

板橋区医師会は多様な区民公開講座を行っています。在宅療養に関しては、前記

した在宅療養ネットワーク懇話会の多職種チームが演じる「寸劇：退院前カンファレンス」が区民の反響を得ていました。内容には療養支援職種の情報提供はもとより、エンドオブライフへの意識啓発なども盛り込みました。公演後アンケート結果からは事前指示明示を希望する区民が参加者の7割を超えていたことも注目されました。

在宅療養に関する社会資源情報に加えて、社会参加の啓発なども今後は必要となるでしょう。

### 2. 区民まつりアンケート

医師会は毎年開催される区民まつりに継続して参加しています。かかりつけ医を持ち安心して療養生活が送れるように様々な周知活動とアンケート調査を行い、区民の声に触れることが可能となっています。

#### ■ 最後に

かかりつけ医は長寿社会の中で加齢に伴う問題にも対応することが求められています。認知症やフレイルなど医療的な分野のみならず、独居高齢者などコミュニティーの問題もかかりつけ医医療に含まれてきました。一方で、地域にはがん、難病や障害を抱えた小児から高齢者の方たちが各々のライフスタイルを大切にしながら療養されています。今後も多方面にわたる事業を医師会が行政と協力して継続していくことが求められることでしょう。地域包括ケア時代にむけて、板橋区医師会事務局スタッフの大きな支援のもとに医師会の更なる活動が望まれます。



の誕生までには紆余曲折があり、苦難の連続でした。その経緯をひも解くことは大変重要なことと考えました。従来板橋区医師会には3か所の訪問看護ステーションと板橋区から委託を受けた高島平在宅介護支援センター（場所は板橋区医師会病院内）があり、それぞれ運営を行っていました。しかし特に訪問看護ステーションは関係者の懸命な努力にもかかわらず経営が苦しく、その対策として1か所に集約する案を前提に何度も委員会で話し合われました。ちょうど平成18年度の介護保険法改正で地域包括支援センターが設立されるのを契機に、毎日のように夜遅くまで議論を重ねて、板橋区医師会病院のある高島平地区に医療と介護の連携のモデルとなるセンターを作ることに決定しました。特に当時の会長であった杉田尚史先生が「訪問看護ス

テーションが1か所になるが、これは決してダウンサイズではない。後方支援病床となる医師会病院のある高島平で医療と介護のモデルを確立し、将来は区全域に広げよう」と熱く語り、板橋区医師会在宅医療センター設立に向け大きく舵をきりました。そしてついに訪問看護ステーションが板橋区医師会高島平訪問看護ステーションとして、高島平在宅介護支援センターが高島平地域包括支援センターとして、また居宅介護支援事業所として板橋区医師会在宅ケアセンターが平成18年9月に開設され、その開所式が同年10月に開催されました。

現在、板橋区医師会在宅医療センターはさらに発展し全国的にも注目をあびていますが、それはその設立に尽くされた多くの関係者の努力があつてのものです。



板橋区医師会在宅医療センター

## 在宅難病患者訪問診療事業

板橋区医師会 理事  
吉野 正俊

在宅難病患者訪問診療事業は、日常生活動作の低下によって受診が困難な在宅難病患者を対象として、専門医、かかりつけ医、訪問看護師、保健師、ケアマネジャー等がチームとして訪問診療を行うことで、医療と介護や福祉との連携を図っていきこうという事業です。この事業では、患者の診療や看護はもとより相談や援助および介護指導なども併せて行っており、連携する機関は医師会、専門病院、保健所、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所等となります。これらのチームが、疾病の程度によって若干の差があるものの、一人の患者に年間2～4回の訪問を行い、訪問診療実施後にケース検討会を開催し、患者の今後のケアについての方針を決めていくこととなります。

本事業の歴史を振り返ってみますと、板橋区では昭和55年頃より行政が独自の取り組みとしてスモン等特殊疾病者訪問指導を行っていました。昭和62年10月東京都医師会が東京都から委託を受け、荒川区・新宿区・渋谷区・日野市・三鷹市・東村山市の各医師会で難病患者訪問診療事業が開始されました。板橋区医師会においては、

東京都からの委託を受けるにあたり、既に始まっていた板橋区の事業との絡みもあったため、当時の板橋区医師会執行部の先生方が医師会内の意見調整を行い、板橋区との協議を重ねた結果、昭和63年5月板橋区医師会臨時総会で本事業計画案と特別会計案が承認された上で、4名の難病患者を対象に本事業がスタートいたしました。以降は、板橋区医師会での本事業の実績は、訪問件数などにおいて全地区医師会の中でも最上位を維持し続けており、最も積極的に取り組んでいる地区であると自負しております。平成28年度の事業実績では、対象患者22名、専門医数5名、主治医数14名、訪問診療実施件数は57回でした。

地域包括ケアシステム構築の視点から見た場合、専門医・かかりつけ医・多職種の関係者の緊密な連携に基づいて進められてきた本事業は、在宅診療における理想的な形態を先取りしてきたと言えるのではないのでしょうか。平成27年1月に施行された難病法によって、助成対象疾病となる指定難病が330疾病にまで拡大されており、今後ますます本事業の重要性が増していくと考えております。

## 医学会通説～ Rome was not built in a day. ～

板橋区医師会 顧問  
安田 榮一

### ■ 日本医師会の生涯教育

肝細胞癌により 57 歳で夭逝した石原裕次郎の歌が巷間を賑わし、「国鉄」が「JR」に衣替えした頃、日本医師会は昭和 32 年～57 年まで 25 年間続いたトップダウン型の武見太郎体制から集団指導型へと引き継がれました。医師会の事業計画の主要な柱の一つであった「医師会員の生涯教育」については、羽田春兔日本医師会長の中核的諮問機関として昭和 59 年「生涯教育推進会議」が発足し、阿部正和東京慈恵会医科大学長を座長に 6 人の委員により精力的な審議が重ねられ、現在の生涯教育制度の骨子となる数々の提言・答申が行われました。答申に則り日本医師会では「生涯教育制度化検討委員会」を設置し、昭和 60 年 12 月「生涯教育制度化のガイドライン」が纏められました。ガイドラインの趣旨に沿い、日本医師会・各都道府県医師会・郡市区医師会の各レベルで“生涯教育委員会”設置の方向となり、各地区医師会の実情にあった創意工夫が求められました。

### ■ 医師会病院の誕生と集談会

板橋区医師会においては、昭和 39 年に起きた区医師会分裂という或る特殊な事情

もあり、止むなく推挙された故・山田潤一会長が就任直後に「これからの開業医は共同のベッドが必要になるんじゃないか」と述べられた言葉に触発され、都市部では極めて稀な「オープンシステムの医師会病院」が昭和 41 年に開設されました。斯くして一部医師会員には既に強力な生涯教育の場が提供されていましたが、上記のような日本医師会の生涯教育への積極的な取り組みに対し地区医師会としても何とか呼応すべく、時の故・山田豊会長の下、種々方策が検討されました。故・高橋祥吾副会長と勝呂長医師会病院長（現 名誉院長）の間で「“学術集談会”をやってはどうか」と話が持ち上がり、故・玉置健英学術部長に相談の結果、昭和 61 年 6 月第 1 回「板橋区医師会学術集談会」が始められたのです。土曜日の午後・1 年に 2 回の予定で、初めのうちは果たして演題が集まるだろうかと危惧されたものの、医師会の心臓検診班・胃部読影班・内視鏡研究施設・胸部読影班による集団検診/学童検診に関連した報告や、板橋区医師会病院各診療科並びに医師会員からの症例報告・研究発表の申し込みがあり、回を重ねるごとに増加して時

には演題制限をするまでとなりました。第3回集談会の抄録集の序文には故・村田耕治会長が「出席された会員が100名、地区開業医の1/3強が出席され……。会員諸先生がよく勉強される姿と、我々が医師会病院を持って良かったという思いが、しみじみと印象深く感じました。医師生涯教育が制度化されましたが、この集談会こそ、板橋区医師会独自の非常にすぐれた立派な生涯教育の実行の場であり、現れであると誇りに思っています」と述べておられます。さらに、第4回の時点ですでに玉置健英学術部長は「病診一体 - 地域に密着せる集談会として益々発展し、将来は板橋区医師会医学会に成長してくれば!!」と抱負を語られ、昭和63年の理事会に於て「板橋区医師会医学会準備事務局」の設置が議決されました。昭和63年11月の第6回からは帝京大学医学部・都立豊島病院からの出題があり、それを皮切りに日本大学医学部・東京都老人医療センターも参加され、区内にある二つの大学病院・二つの都立病院との連携により一層揺るぎ無い存在となったのです。平成3年の第11回には堀内健二郎会長が「板橋区医師会学術集談会のような地域特性を生かしたものにこそ存在価値が大いにあるのではないのでしょうか。病病・病診・診診連携から生まれた貴重な研究発表や医師会事業に関連したもの、看護に携わる立場からの研究発表等、大いに期待しています。時代は大きく変わって医療を取り巻く問題は医師一人だけで成し遂げられるものではない」として、第15回には「在宅医療・ケアが叫ばれている昨今では、さ

らに多くの人達が一人の患者或いはその家族達と関わりを持つようになります。医師会が主催する学術集談会は今後もっと幅広く、多くの関係者からの出題をお願いいたします。看護・介護・ケアの現場からも貴重な体験を聞かせていただきたい」と進むべき方向性を示されました。平成7年になり、今本喜久男会長は「この集談会は専門分科会と違い分野の異なる人達の集まりではありますが、様々な社会的変化に対応し、地域に根差した医療全体を見渡す視野に立った特徴のある医師会集談会として発展して参りました。これからも地域内の交流をさらに進めてこの集談会の役割を広げ発展させる」として医学会への発展的解消を決断されました。第20回最後の集談会には、これまで最多の26演題の発表があり、夜の7時頃まで発表が続きました。

#### ■集談会から医学会へ

林滋副会長を医学会準備委員長として、他8人の委員により約1年かけて検討が重ねられ、平成8年6月「第1回板橋区医師会医学会」が装いも新たに発足しました。これまでの10年間に亘る集談会の流れに沿ったもので、「**地域医療に貢献できる医学**



第1回板橋区医師会医学会(於 医師会館)

会”が基本理念であり、(1)開催日は土・日の2日間で土曜日の午後は一般演題の発表とし、(2)日曜日の特別講演・シンポジウムは区民公開とする、(3)「板橋区医師会医学雑誌」をISSNに登録する、等々、林滋委員長のリーダーシップにより今日に繋がる医学会の雛形が出来上がったのです。因みに第1回医学会の特別講演は国立がんセンター阿部薫総長の「がん診療の現状」、シンポジウムは「21世紀に向けた地域医療について—現状と将来について—」でありました。第1回(平成8年)～第22回(平成29年)までの特別講演・シンポジウムの題目は一覧表に示します。今本喜久男会長は「病気に関するものだけでなく、看護をはじめコメディカルの方々、訪問看護ステーション、おとしより地域医療センターなど幅広い分野にわたり、社会に開かれたこれからの医師会のあり方を示した特徴ある医学会になっています。今後この医学会がますます地域包括的な学会となるよう努力する所存です」と言われ、第2回の青木恒春会長も「今回は演題やシンポジウムの関係もあり、板橋区の歯科医師会・薬剤師会・保健所・消防署・練馬の自衛隊・一般区民の方々も参加され、まさに板橋区の医学会という感じがあり、今後の地域における医療の担い手として、病診連携・在宅医療の推進の場としてこの医学会を育てていきたいと考えます」と述べられています。第5回からは、病院の建て直しが完成した都立豊島病院の再参加もあり、野口晟会長は「私達は江戸川区医師会・練馬区医師会に続いて、東京都医師会に属する医師会医

学会の3番目として発足し(表)、両医学会に追いつき追い越せと関係者一同努力して参りましたが、幸いにして委員及び会員の皆様の努力並びに近隣の大学病院・公立病院等の皆様の御助力のおかげで、今や質・量ともに先輩の医師会の医学会に比肩する医学会に成長できたと考えています」とした上で、更なる飛躍を求めて平成13年から板橋区との共同開催に踏み切りました。演題数、出席者数ともに順調に増加し、平成14年、第8回の特別講演「新型コロナウイルス肺炎SARS(重症急性呼吸器症候群)」は板橋区医師会立看護高等専修学校の学生30名も聴講し、区民公開講座は330名と略満席の状態でした。杉田尚史会長は「我々地区医師会は地域医療、福祉に区と連携をとりつつ区民の健康の増進を図っている学術団体である」と位置付け、「医学会は区の共催も追い風となり、東京都で最大の規模にまで成長してきました。これを我々は自己研鑽の場としてだけでなく、このように区民に開かれた医師会を理解してもらう重要な機会と考えます」と述べ、第10回では「もの忘れ相談医養成研修会」と「AED心肺蘇生法講習会」も併施されました。「AED講習会」は平成17年～21年まで5回にわたり一般区民の参加を募って開催され大変好評でした。第13回からは一般演題の中に「要望演題」の括りを設け一部演題の集約化が図られました。毎年「医学会」が終了して間もない時期から医学会委員会のメンバーは翌年のテーマを検討し、一般演題にもその時代の潮流に沿ったup-dateなテーマが取り上げられるように

なっています。平成23年の第16回に天木聡会長はこれまでの医学会の目的を、「(1)医師会会員の生涯学習と医学的知識の共有 (2)医師会の公益性を考え、区民啓発を目的とした区民参加型公開講座 (3)板橋区内の医療・福祉提供者との連携と情報共有の強化」と明文化し、「医師以外の医療福祉に関係する多職種からも演題を広く募集し、多くの分野の専門職種の方々との意見交換の場を提供させていただいている」と(3)を強調されました。第19回には2日間で合計996名の来場者があり、区民公開講座を開始した第2回目が333名であったのに比し約3倍となり、「今年度新たに設けた“公益社団法人板橋区医師会若手医師奨励賞”の授賞式と4名の受賞者研究発表を行いました。新進気鋭の若い先生方の今後の活躍が期待されます」と述べられています。平成28年、第21回医学会誌の巻頭文に水野重樹会長は「今回で第21回目の医学会を迎えることができました。これも皆様のご協力とご支援の賜物と感謝申し上げます。また医師会会員並びに関係各位の方々のご尽力や諸先輩方が築き上げてこられたご努力を忘れてはならないと改めて心にとめています。……実際、演題を拝聴した感想ですが、回を重ねるごとに、質の高い発表となっていることは勿論、発表の場と臨床の場が直線上にありその距離が縮まるすなわち明日からの日常診療に直ぐに役立つものとなっており、質の高い医療が提供されていることを改めて感じ取ることができました。……板橋区医師会では、常に現代の潮流に合わせた医学会を開催しており、今回

も多職種の方々の参加とすばらしい演題発表を通して、多職種間連携を強固なものとしたと確信しております」と述べられています。

### ■おわりに

第12代～20代にかけた板橋区医師会長を中心に生涯教育・学術集談会・医学会の経過を振り返りました。一貫して“地域医療に貢献できる医学会”という理念が貫かれ、回を追う毎にグレードアップされてきた姿は見事というほかありません。歴代会長のもと、学術部を中心とした医師会執行部の方々の並々ならぬ努力と医師会事務局の尽力により「板橋区医師会医学会」の順調に成長し定着した姿をみて、情熱を傾けられながら幽明境を異にされた諸先輩も泉下で喜んでくださっているものと推察します。国の社会保障政策・医療提供体制の変化に対応し、加速化する医療のイノベーションにも順応して着実に地域医療を展開し、「板橋区医師会医学会」が更に発展することを期待します。

### 平成28年度開催 東京都医師会所属医師会医学会

学会名	主催医師会
第34回江戸川医学会	江戸川区医師会
第23回練馬医学会	練馬区医師会
第22回板橋区医師会医学会	板橋区医師会
第19回浅草医学会	浅草医師会
第16回世田谷区医師会医学会	世田谷区医師会
第10回江東区医師会医学会	江東区医師会
第2回しながわ・えばら医学会	品川区医師会・荏原医師会

## 板橋区医師会医学会開催一覧(第1～22回)

(敬称略)

回数・開催日	プログラム		
第1回 1996年(H8) 6/22・23	1日目	特別講演 シンポジウム	がん診療の現状 - 終末期医療についても - 講師：国立がんセンター総長 阿部薫 21世紀に向けた地域医療について - 現状と将来について -
第2回 1997年(H9) 7/26・27	2日目	特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2	高齢化社会における医療・保健・福祉の目標と評価 講師：東洋大学社会学部教授 園田恭一 板橋区における大災害時の医療対策 板橋区における在宅医療の構築
第3回 1998年(H10) 8/29・30	2日目	シンポジウム1 シンポジウム2	幼児学童期の精神面の諸問題と現場での対応 介護保険と医療・福祉の連携
第4回 1999年(H11) 7/10・11	2日目	特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2	医療制度改革案について - 特に参照価格制度について - 講師：東京都医師会会長 佐々木健雄 幼児学童期の感染症 板橋区における介護保険の準備 - 本音で語る介護保険 -
第5回 2000年(H12) 8/26・27	2日目	特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2	胃癌診断・治療の進歩 講師：国立がんセンター名誉院長 市川平三郎 小児救急 介護保険の現状と問題点
第6回 2001年(H13) 7/14・15	2日目	特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2	医療と情報 講師：北里大学教授 養老孟司 小児の生活習慣病 成人における生活習慣病を考える
第7回 2002年(H14) 9/28・29	2日目	特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2	お医者さんのかかり方が変わる？ 講師：医事評論家 行天良雄 小児のアレルギー - アレルギーを知りましょう - 病院のかかり方 - かかりつけ医をもちましょう -
第8回 2003年(H15) 9/27・28	2日目	特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2	新型ウイルス性肺炎 SARS (重症急性呼吸器症候群) 講師：国立感染症研究所感染症情報センター長 岡部信彦 板橋区健康づくり21計画 - 健康でいきいきとした暮らしをめざして - 身近な感染症の予防 - あなたももう一度見直しませんか -
第9回 2004年(H16) 9/25・26	2日目	特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2	地域で痴呆を支える：かかりつけ医の役割 講師：東京都老人総合研究所 痴呆介入研究グループ参事研究員 本間昭 こころの生涯健康を考える 『たばこ』健康づくり・まちづくりの視点から - 健康づくり応援型のまちの実現をめざして -
第10回 2005年(H17) 9/24・25	1日目	研修会	もの忘れ相談医養成研修会 講師：東京都老人医療センター精神科 高橋正彦
	2日目	特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2 AED 講習会	若年者の性行動に向き合って 講師：赤枝六本木診療所院長 赤枝恒雄 健やかな老後をめざして - 介護予防と疾病予防 - これからの板橋の認知症ケアを考える
第11回 2006年(H18) 9/23・24	1日目	教育講演 研修会	健診を評価する：その意義と方法 講師：聖路加国際病院院長 福井次矢 もの忘れ相談医養成研修会 講師：板橋区医師会理事 弓倉整
	2日目	特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2 AED 講習会	健康づくりの食べ方と玄米ニギニギダンベル体操 講師：早稲田大学スポーツ科学学術院教授 鈴木正成 板橋区の子育て支援 板橋区における脳卒中対策について

回数・開催日	プログラム	
第 12 回 2007年(H19) 9/8・9	1日目 教育講演 研修会 2日目 特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2 AED 講習会	特定健診・特定保健指導 - 地域における新たな生活習慣病予防システムの構築 - <b>講師：日本医師会常任理事 今村聡</b> もの忘れ相談医養成研修会 <b>講師：東京都老人医療センター精神科部長 小山恵子</b> メタボリックシンドロームを撲滅するために <b>講師：帝京大学内科学主任教授 寺本民生</b> 気になる感染症 - 一体、いま何が問題なの!? - いざ、病気になったら - 効率的な医療機関へのかかり方 -
第 13 回 2008年(H20) 9/6・7	1日目 教育講演 研修会 2日目 特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2 AED 講習会	医療関連死と監察医制度 <b>講師：東京都監察医務院院長 福永龍繁</b> もの忘れ相談医養成研修会 <b>講師：こだまクリニック院長 木之下徹</b> 豊かな生、豊かな死のために <b>講師：ノンフィクション作家 柳田邦男</b> 子どもの心のケアについて 実戦！メタボリックシンドローム撲滅
第 14 回 2009年(H21) 9/26・27	1日目 教育講演 要望演題 1 要望演題 2 2日目 特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2 AED 講習会	医療と政治 - 医政活動の原点を考える <b>講師：東海大学教授 武見敬三</b> 糖尿病の介護と保健について 穏やかな最期を迎えるための医療と介護 糖尿病の早期治療の意義は？ / 特定健診・一般健診を活かそう <b>講師：順天堂大学大学院教授 河盛隆造</b> 考えよう日本のあした - 見直そう 子どもの生活習慣 - 早く見つけよう！ - がんなんて怖くない -
第 15 回 2010年(H22) 9/25・26	1日目 教育講演 要望演題 1 要望演題 2 2日目 特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2 研修会 1 研修会 2	超高齢社会における医療介護の展望 <b>講師：東京大学高齢社会総合研究機構教授 辻哲夫</b> 退院前カンファレンス ~ 入院から在宅まで、切れ目のない連携 ~ 施設間連携 二人の主治医 (共同診療) 自分らしい死をどう迎えるか <b>講師：元臨済宗佛通寺派管長・僧医 对本宗訓</b> 次世代を担う子どもの健康を守るために 在宅でも安心！医療と介護 産業医研修会 医療安全研修会
第 16 回 2011年(H23) 9/24・25	1日目 教育講演 要望演題 1 要望演題 2 特集 2日目 特別講演 シンポジウム1 シンポジウム2	いつか大事故が起こる - 平穏無事は危険信号 - (医療安全研修会) <b>講師：船橋市立医療センター副院長 医療安全管理室室長 唐澤秀治</b> 小児在宅医療 退院を含めた在宅療養支援 災害医療支援 (東日本大震災を中心として) ロコモと介護予防 - 寝たきりを防止するために - <b>講師：日本臨床整形外科学会理事長 藤野圭司</b> 認知症！地域の力で支えよう 子育てアドバイス
第 17 回 2012年(H24) 9/29・30	1日目 教育講演 要望演題 1 要望演題 2 2日目 特別講演 シンポジウム	東京都医療連携手帳の普及に向けて - がん診療に求められる医療連携 - <b>講師：都立大塚病院副院長 鶴田耕二</b> 胃ろう (経管栄養法) を考える 医療・介護現場における患者対応 いのちを商品にした国アメリカ ~ 日本の宝を守るには ~ <b>講師：ジャーナリスト 堤未果</b> 「災害と医療」 午前の部「災害時の医療ネットワーク」 午後の部「東日本大震災に学ぶ災害時の医療」

回数・開催日	プログラム		
第18回 2013年(H25) 12/7・8	1日目 教育講演 (医療安全研修会) 要望演題1 要望演題2 2日目 メインテーマ 特別講演  トークセッション シンポジウム	最近の医療訴訟の傾向と対策～診療所の法的リスクマネジメント～ 講師：棚瀬法律事務所代表弁護士 棚瀬慎治 地域における多職種連携 糖尿病に関わる複数科連携 宇宙医学の社会への還元 宇宙と健康－安全な暮らしを支える宇宙開発－ 講師：JAXA 宇宙飛行士/宇宙医学研究センター長 向井千秋 有人宇宙飛行 黎明期に活動した二人の医師と宇宙飛行士が語る 宇宙医学と健康長寿	
第19回 2014年(H26) 9/13・14	1日目 教育講演 2日目 要望演題 映画上映 特別講演  シンポジウム	新型骨粗しょう症の恐怖－生活習慣病は要注意－ 講師：東京慈恵会医科大学整形外科学講座准教授 斎藤充 小児医療に関する最近の話題 「最高の人生の見つけ方」 人生の最期を穏やかに過ごすために 講師：めぐみ在宅クリニック院長 小澤竹俊 今日からできる認知症の予防	
第20回 2015年(H27) 9/12・13	1日目 教育講演 2日目 要望演題 映画上映 特別講演  シンポジウム	専門医としての総合診療医～専門医制度とかかりつけ医の役割～ 講師：一般社団法人日本プライマリ・ケア連合学会理事長 丸山泉 難病・がん患者に対する新たな治療・療養の支援 「エンディングノート」 和食と健康 講師：静岡文化芸術大学学長 熊倉功夫 脳卒中の予防と治療	
第21回 2016年(H28) 9/10・11	1日目 教育講演 2日目 要望演題 映画上映 シンポジウム	診療関連死と監察医制度 講師：東京都監察医務院院長 福永龍繁 癌の予防・早期発見・治療・リハビリ・終末期 「ベコスの母に会いに行く」 認知症を地域が支える、みんなで支える 基調講演「認知症とともに生きる社会に向けて」 講師：東京都健康長寿医療センター研究所研究部長 栗田主一 対談講演「認知症とともに、よりよく生きる」 講師：認知症とともに歩む本人の会代表 佐藤雅彦	
第22回 2017年(H29) 9/2・3	1日目 教育講演 2日目 要望演題 映画上映 特別講演  シンポジウム	認知症高齢者をめぐる諸問題 講師：東京都健康長寿医療センター研究所研究部長 栗田主一 認知症の現状と課題～診断・対策・ケア～ 「徘徊 ママリン 87歳の夏」 健康長寿の秘訣：最近の考え方 講師：東京都健康長寿医療センター研究所副所長 新開省二 元気な高齢者を目指して！フレイルって何ですか？	

